



Title	新文字による外蒙古口語文典の特徴と従來の文典との比較
Author(s)	精松, 源一
Citation	大阪外国語大学学報. 1952, 1, p. 121-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80089
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新文字による外蒙古口語文典の特徴と從來の文典との比較

精 松 源 一

Characteristics of "The Grammar of Khalkha Mongolian Spoken Language" in new letters as compared with grammars which have hitherto been used.

Abematsu Gen-ichi

S u m m a r y

The Grammar of Khalkha Mongolian Spoken Language was published at Ulaanbaatur City of Khalkha Mongol in 1946. I introduce these Pages especially to show difference between this spoken language of Khalkha Mongol and the present-day Mongolian language. The reason why the Russian letters, without using existing Mongolian letters, are used is the imperfection of Mongolian letters to represent foreign pronunciation. And besides, a motive to neglect Mongolian letters extending the use of Russian letters should be taken into account.

The Grammar of Khalkha Mongolian Spoken Language shows that this language vastly differs in pronunciation and grammatical construction from Inner Mongolian spoken language, and this makes it very urgent to acquire the knowledge of this grammar when new Khalkha Mongolian books are published and people are driven by necessity to speak it.

This original *Grammar* is divided into one hundred and fourteen chapters, and out of these contents I have selected especially important points which I explained according to the following classification.

- No. 1. Number of vowels and consonants.
- No. 2. Harmony of vowels.
- No. 3. Syllables.
- No. 4. Language of negative verbs.
- No. 5. Auxiliary verbs.
- No. 6. Movement of verbs.
- No. 7. Verbs suffixes (present, past and future.)
- No. 8. Capital and small letters.
- No. 9. Punctuation.
- No. 10. Method of writing name of person.
- No. 11. Way of transcribing foreign languages.
- No. 12. Abbreviations.

新文字による外蒙古口語文典は蒙古人の damdinsürén と tsebegjab との共著で1946年にウランバートル市に於て出版されたもので中の文字は全部ロシア文字を以て蒙古語を寫しロシア文字によつて蒙古語を表音できない語に對しては特殊文字即ち蒙古語の女性母音 ó を表わすのに Ө を、ü を表はすのに Y を用いている。

この文典は従來の蒙古文字を廢して蒙古人にロシア文字を普及せしめんとする意圖より成つたものであることは疑なく、又一面に蒙古人に對し正しい文法の智識を授けんとしたものでその説明も極めて簡單で初歩用の文法書といえる。全1冊で114章よりなり、文中所々に練習問題を出し、諸種の文章も多數に加えてあり、最後に現在外蒙古で用いられるロシア語よりの轉來語も分類して添えてある。ただし紙質が悪く印刷技術の進歩していない所から、不鮮明で理解できない所もある。

この外蒙古文典を知らずして蒙古人民共和國の新時代の蒙古語を理解することはできないのでわが國唯一の原書を辛うじて寫し終り一讀の後従來の蒙古語文法と異なる重要な點に就て紹介を兼ね説明する次第である。

原書がロシア文字であるので本文もロシア文字を用いる可きではあるがロシア文字にない新文字もあり、印刷の關係もあるので不正確ではあるが、假にローマ字を以て表わすことにした。

第一、母音、子音の數に就て

従來の規則によると蒙古語は母音7個（男性母音 a, o, u, 女性母音 é, ó, ü, 中性母音 i）と子音20とされていたが、新外蒙古文典によると母音を13個とし、在來の母音7個の外に ya, yo, ye, yu, ui, ü（半母音）の6個を加えている。而して従來の7個の母音（a, é, i, o, u, ó, ü）を基本母音と名付け、残りの6個の母音を補助母音といつている。

子音は従來 n, H, G, h(g), b, p(又は f), s, sh, t, d, l, m, ch, j, y, r, ts, tz, w, ng, hs, k', G' 等で其等の中で ts, tz, hs, k', G, 等は外來語、主として西藏語や支那語その他の外國語を寫すために用いる文字として使用され、純粹の蒙古語子音ではなかつたのであるが、此の新外蒙古文典によると子音としては b, v, g, d, j, z, k, l, m, n, p, r, s, t, f, h, ts, ch, sh, shch の20個を挙げ此等の中で p, k, f, shch の4個を特別な子音といい、k, f, shch は蒙古語には決して用いず、外來語にのみ用い、p の文字は蒙古語に於ては語頭にのみ用い、外來語に於ては語頭、語中、語尾の何れにも書かれる。今 p を用いた例を挙げると、

pioner（赤色少年團員） apteli（協同組合） okop（塹壕）

又 k を用いた例を挙げると、

kapital（資本）

又 f を用いた例を挙げると、

fabrik (工場)

第二、母音調和について

外蒙の新文典を読んで最も深く感ずることは母音調和の規則が正しく守られていることである。蒙古語の母音は男性、女性、中性の3つに分かれ、1つの単語の中で男性母音と女性母音とが混じることは決してなく、言葉の初に男性母音の a があればその後に続く母音はやはり男性に属する母音でなければならぬ。又女性母音が語頭にあると、その後に来る母音はやはり同じ女性の母音の何れかである。従つて1つの語を構成する幾つかの母音は總べて男性同志でできた男性語となるし、又女性母音同志でできた女性語ということになる。但し中性母音 i のみは男女両性の何れの語にも混じることができて、若し男性語の中に中性母音 i が混じると、男性語となるし、女性語の中に混じると女性語となる。しかし中性母音のみよりできた語は女性語として取扱はれ、女性の接尾語を附することになる。斯かる現象を母音調和という譯で今日迄蒙古の文法で規定されたのであるが、この外に新外蒙古文典によると地名、人名や外來語に於てはこの母音調和の法則が守られず、一語中に男女両性の母音が混じつて来る場合が非常に多い。それは外來語をその發音通りに寫す必要から來たものであるので、止むを得ない譯である。例えば、

Leningrad, Argentin (何れも地名、ただし e は y^é の音で女性母音である)

打消の gúi は動詞の語幹と連結して書くので男性の動詞語幹にこの gúi を連結すると男女両性の混じつた語になる。この例は打消の説明の所を参照されたい。

外蒙新文典に於ては上記の母音調和の法則以外に更に詳細に説明してあつて、それを述べると

1. 最初の音節に a, 又は u があると次に来る曖昧な母音 (原書には第2音節以下の母音は餘り明瞭に聞えないので曖昧な母音というと書いてある) は a になる。例えば

altan gadas (北極星) nutag (郷里)

2. 最初の音節に é, ù, i の何れかがあつると、次に来る曖昧な母音は é になる。例えば、

gèrèltèj (光つて) sùrèg (群) idér (壯年の)

3. 最初の音節に o があると次に来る曖昧な母音は o に、ó があると後に来る母音は ó になる。

例えば、

holbogdoh (連絡される) óndór (高い)

4. 最初の音節に ya があると、次の母音は a になり、ye があると次に来る母音は o になる。

例えば

yalgal (區別) yoslol (禮儀、儀式)

5. 最初の音節に ye があり、之が iò の發音になると、次に來る母音は ò になる。例えば
yesòn (9つ)
又 iè と發音されるならば後に來る母音は é になる。例えば
biyelèh (實現する)
6. 最初の音節に yu があり、その語が男性語なら次に來る母音は a になる。この yu が女性語の最初の音節に來ると、次に來る母音は é になる。例えば
yuuhan (何か) yuùdèn (頭布)
7. i の母音は母音調和の法則に支配されず、如何なる母音のある語にも混じることができる。
例えば
salhi (風) sonin (新聞) tahir (不具の手足)
8. この母音調和の法則は長母音及二重母音(原書には二重母音とあるも複母音のこと)にも同様に適用される。例えば
arab (十個) arbaad (十個許り) arabtai (十個を有する) yabah (行く) yabaad (行つて) yabaarai (行つて下さい)
9. 長母音の uu, uù, yuu, yuù, you, yau は母音調和の法則に關係なく、o, yo, ó, ye に始まつた音節の中に混じり、且つ o, yo, ó, ye の影響を受けないので、後に來る母音は uu, yuu yau, you の次には a が、yuù, úú の次には é が來る。例えば
olduulah (得させる) yosluulsan (敬禮させた) hoyoulan (2人) yesùùlèntéi (9人の者と)
10. ii, èi, の3つが語中に來た時は、次に來る母音に影響を及ぼさない。例えば
òngùtèihòn, toliisan, nominhoo

第三、音節について

幾つかの文字より成る蒙古語を數個の音節に分けることができる。例えば
ter (彼) ih (大きい) nom (本) chamd (きみに) の如きは1音節の語であり、
modon (木) herem (壁) chono (狼) 等は2音節の語で urgamal (植物) gazruudad (土地等に) の如きは3音節の語である。
これらの音節の切り方は、

1. aduu (馬群) ùnèn (眞實) の如く語中に於て母音の間に1つの子音が挟まると、その子音の前で音節を切るので a—duu と2音節になり、ù—nèn も2音節になる。
2. èdlèl (財産、器具) èldèb (一切の) の如く語中に於て子音が2つ連續すると、その2つ

の中で音節を切るので éd—lél と 2 音節になり、él—déb も 2 音節になる。

3. dabstai (鹽のある) の如く語中に 3 つの子音文字が連続すると、第 3 の子音の前で切るの
で、dabs—tai と 2 音節になる。

従來の蒙古文字による蒙古語は 1 つの行の終りから他の行に移る時に、言葉を切斷して書くことはできない規則になっていたがロシア文字で書く蒙古語は之が自由にできることになっている。ただし之にも規則があつて、1 つの語を必ず音節で切ることになっているので、例えば mongol なる語を行の終りに於て他の行に一部分移して書こうとすれば、當然 mon で切り、残りの gol を他の行に移すことになる譯である。しかしこの場合切斷された 2 つの音節の間に — を置くことになっている。

第四、打消の言葉について

打消に就ては úgúi, ódii, úl, és, bisi 等がある。而して ódii, úl, és, bisi の 4 者に就ては従來内外蒙古に於て用いられて來た用法と何等變りはないが、úgúi のみは従來の用法と異なる點があるので述べて見よう。

従來の蒙古文字による蒙古語であると、úgúi と發音し、動詞の不定法の下に置き、例えば行かないという未來形ならば yabuhu úgúi といった、又過去の否定ならば、動詞の語幹に過去形の gsan (gsén) を連結し、úgúi を置いて行かなかつたということを yabugsan úgúi というたのであるが、新外蒙文典に於ける打消はこの úgúi を úgúi と發音したり、又時には單に gúi と發音している。而して úgúi と發音する時には前の言葉と別個に書くもので、この場合には úgúi は獨立の意味を有するのである。

gúi と發音する時には必ず前の言葉と一緒に書くのである。前に來る動詞が男性女性の何れであつても、この gúi という女性語を連結するのであるから、従來蒙古語は何れの語を見ても皆母音調和の法則に適い一語中に性を異にする母音子音の混入することの決していないという法則とは全く反する譯である。例えば

iréhgúi とすれば「來ない」という意味で

yabsangúi とすれば「行かなかつた」の意味になる。

なお従來は蒙古文字を用いて動詞の不定法と打消の úgúi を連結して口語体の發音通り書く方法もあつて、iréhkúwéi (來ない) と發音し、蒙古の一地方では irékúwéi と發音し、動詞が男性なら huwai を連結し、yabuhuwai (行かない) と書いていた。然し動詞の男性女性の何れに拘らず女性語の gúi を連結するのは全く従來と異なつた形といえよう。

gúi はまた單に動詞と連結するのみでなく、名詞とも連結する。これも變つた形である。しか

しこれは形容詞となるか、又は同じ性質を有する時に前の語と一緒に書くのである。例えば

従来ならば usu úgèi (水が無い) と別個に書く所を usgúi とし、yumgúi hún とすれば「物のない人」即ち「貧乏なる人」の意味になる。

第五、格の助詞について

従来蒙古語の口語体に於ける **第一格** 即ち主格の助詞 (は、が) としては主として bolbala があり、これに次いで chin, min を用いる場合もあつた。又簡単な文に於ては省略し勝ちであつたが、新外蒙古文典にあつては、bolbala を省略簡単にした bol と ni が用いられ (但し ni は正しくは人稱物主代名詞の三人稱單數に用いられ ah ni とすれば 彼の兄は の意になる。然し普通に單なる 第一格の助詞 ハ、ガ の意味に使つてある)、又簡単な文章では省くことになつてゐる。例えば

boroo bol (雨は) uchir ni (譯は)

尙 bol と ni との嚴密な區別に就ては、今その暇がないので省くことにする。

第二格の助詞 即ち所有格 (の) としては従来は主として、口語体に在つては nai (néi) を用い、この外に文語体の助詞 in, un (ún), u (女性 ù) が轉用されていたが、外蒙古の新文典によると、語尾が n 以外で終る物には、iin を (但しロシア文字で書けば男性、女性語により iin でも書方を異にするのであるが、ローマ字では表はせないで iin 一つにした) 語尾が n で終つてゐる語は單に ii を (之もロシア文字で書けば男性語、女性語によつて區別して書く) 語尾が複母音 (原書には二重母音という) で終ると單に n を附し、語尾が長母音に終つてゐる語には nii を (之も實際には區別して書く) 附し、語尾が鼻音の n で終るものには giin を附することになつてゐる。例えば

ah+iin (ahiin 兄の) jil+iin (jiliin 年の) jochin+ii (jochinii 客の) úhin+ii (úhinii 娘の) nohoi+n (nohoin 犬の) dùú+nii (dùúnii 弟の) san+giin (sangiin 倉の)

第三格の助詞 即ち場所格 (に) としては従来 tur (túr) dur (dúr) を用いて口語体に於ては tu (tù) du (dù) と發音し或は ta (tè) da (dé) の形もあつたが新文典では t, d を用いてゐる。即ち言葉の語尾が r, s, g に終ると t を附し、r, s, g 以外の物で終ると d を附す、ただし語尾が t, d で終つてゐると接合母音を入れて d を附するものであり又語尾が r で終つてゐても、例外として d なる助詞を附することがある。例えば

úhér+t (úhért 牛に) aimag+t (aimagt アイマツクに) has+t (hast 玉に)
sonin+d (sonind 新聞に) dalai+d (dalaid 海に)

例外 ar+d (ard 背後に) sar+d (sard 月に)

第四格の助詞 即ち目的格(を)としては従来 i, gi でこれを口語体では上の言葉と續けて發語し又 i, gi は夫々用法が異なつていた。新文典によれば語尾が長母音、二重母音(複母音のこと)及び鼻音 n で終ると g を附す。例えば

aduu+g (aduug 馬群を) gahai+g (gahaig 豚を) baishin+g (baising 建物を)

又上述の語尾以外で終っている語には iig (ロシア文字ならば男性女性の語により區別して書く)を附す。例えば

nom+iig (nomiig 本を) mori+iig (moriig 馬を)

ただし二音節以上の語にこの iig を附する時には最後の音節の母音を省く。例えば、

érdém+iig (érdmiig 學問を)

なお新文典では簡単な文章にはこの助詞を省いてもよいことになつてゐるが、これは従来と同様であるが、新文典では目的格の前に形容詞が來ると助詞を要すとしている。例えば、

Bi tsagan moriig usalna (わたくしは白い馬に水を與える) の moriig が mori (馬) に iig (を) を附したものである。

第五格の助詞 即ち奪格(より)としては従来は échè を用い口語体に在つては前の語が男性ならこれを as 女性語なら ès と發音し、何れも前の語と續けて發音することになつて居り、又時に nas (nés) を用いたり、或は前の言葉の終りが複母音の時には男性ならば gas 女性なら gès を附することになつていたが、新文典ではこの法則に變りはないが、唯母音調和の関係で發音が aas, èès, oos, óòs, naas, nèès, noos, nóòs, gaas, géès, goos, góòs と夫々四通りになつてゐる。今その例を少し挙げると、

ah+aas (ahaas 兄より) èh+èès (éhèès 母より) nòhór+óòs (nòhóróòs 友達より) hot+oos (hotoos 町より) dalai+gaas (dalaigaas 海より) nohoi+goos (nohoigoos 犬より)

第六格の助詞 即ち造格(によつて)としては bar (bér) yiar (yiér) があり、此等は口語体に於ては前の語が男性なら ar、女性なら ér と読み前の語と續けて發音し、又語尾によつて nar (nér), gar (gér) とも發音していたが、新文典では前の奪格と同じく、母音調和により aar, èèr, oor, óór, naar, nèèr, noor, nóór, gaar, géèr, goor, góór となる。又二音節以上の語に在つては最後の音節の母音を省いてこれらの助詞を附するものである。例えば、

bichig+èèr (bichgéèr 本によつて)

第七格の助詞 即ち共同格(と)としては従来だと口語体では前の語が男性なら tai 女性なら

tèi と發音していたが、新文典では母音調和によつてこれを三通りに分けている。例えば、

aha+tai (ahatai 兄と) jochin+toi (jochintoi 客と) nôhòrtèi (nôhòrtèi 友達と)

第六母音の移動について

詳細なことは到底できないので主要な點のみを簡単に述べて他は後日に譲りたい。いかなる場合に母音が移動するかという次の如き場合である。

- 1 母音に始まる接尾語を前の言葉の語尾に附ける時、この語の最後の子音の前の母音、換言すれば最後の音節の母音が省かれて後方に移動する。例えば、

olon (多數) + oos (olnoos 多數より)

hèrèg (仕事) + èèr (hergèèr 仕事によつて)

- 2 語尾に母音に始まる接尾語でなく、子音に始まる接尾語を付けても、母音が移動することがある。例えば、

busad (他の者達) + d (busdad 他の者達に)

suragchid (學生達) + d (suragchdad 學生達に)

以上は母音の移動の例を挙げたのであるが、母音の移動しない場合がある。それを次に示すと

- 1 j, ch, sh を除く他の子音の後に來た i 母音は移動しない。例えば、

tanil (知人) + aar (tanilaar 知人によつて)

tarh! (腦) + naas (tarhinaas 腦より)

- 2 語中に來た區別する母音は移動しない (この區別する母音とは喉音 g の次の a, o, 舌音 n の次の短母音を指す) 例えば、

ùnèn (眞實) + èèr (ùnènéèr 眞實によつて)

zagas (魚) + iig (zagasiig 魚を)

- 3 母音を伴う七つの子音 (m, n, g, l, b, v, r) の内の何れか一つは後に母音に始まる接尾語を附けたために母音を後方に移動せしめない。例えば

bolobsrol (文化) + oor (bolobsroloor 文化によつて)

- 4 動詞の語尾の h の字の前の母音は他へ移動しない。例えば、

boloh—bolohod—bolohdoo

- 5 第三音節に來た舌音の n 及び喉音の g の字の前の母音は移動しない。例えば、

zulzaga (雛) —zulzagaar (雛によつて)

hundaga (盃) —hundagalah (盃に酒を注ぐ)

- 6 九つの半子音 (d, t, z, j, ts, ch, s, sh, h) の次に來た九つの半子音 (換言すれば九つの半子

音の何れかが二つ續いている時)は後に來る母音を移動させない。例えば、

nóhtsól (接尾語) —nóhtsóliig (接尾語を)

unshdag (常に讀む) —unshdagaas (常に讀むより)

7 人名、地名、外國語中の母音は移動しない。例えば

ulaanbaatar (ウラン・バートル、外蒙の首府) —ulaanbaatariin (ウラン・バートルの)

第七、動詞の現在、過去、未來を表はす接尾語について

動詞の現在、未來を表はす接尾語としては、從來は口語体に於て動詞が男性ならその語幹に na を、女性なら né を附して發音したものであるが、外蒙古の新文典によると動詞の語幹の第一音節の母音如何によつて、即ち第一音節が a 又は u であると接尾語は na を、é, i, ú であると né を o であると no を ó であると nó を附するとことになつてゐる。従つて從來の男性 na、女性 né の二通りの發音と異なり、四通りの發音となる譯である。例えば

語 幹	接 尾 語	現 在 及 未 來
mana (番をしなさい)	na (ます)	manana (番をします)
unsh (讀みなさい)	na (ます)	unshna (讀みます)
bich (書きなさい)	né (ます)	bichné (書きます)
méd (知りなさい)	né (ます)	médné (知ります)
ochi (行きなさい)	no (ます)	ochino (行きます)
óg (與えなさい)	nó (ます)	ógnó (與えます)

なお接尾語は現在、未來とも同一形であるので、一見した丈では現在の事を云つてゐるのか、未來のことを指しているのか區別がつかないが、これは文章の前後の關係等によつて判斷することになつてゐる。

動詞の過去を表はす接尾語としては、從來の文法によると、動詞の語幹に口語体ならば gsan (gsén), ba (bè), la (lè), ji 等の接尾語を附していたが新文典に依ると昔に過ぎ去つたこと、即ち大過去には、動詞の語幹の男女兩性の如何を問はず、jèè 又は chéè (此は語幹の終りの r, g, s, d に終る時に用いる) を用い、餘り時間の経過していない中過去には b を用い今終つた許りと云ふ様な現在完了即ち小過去には動詞の初の音節の母音如何により、laa, lêè, loo, lóó の何れかを附することになつてゐる。なお過去形に san (sén) なる形があるか之は動詞の連体形として用いられ、終止形となつた時には單なる過去ではなく、「……しましたよ」の如き感情を含むものようである。例えば

1 Ulaan tsérégt bid bëlóg yabuulj baisan. (赤軍にわたくし達は贈物〔慰問品〕を送つてい

ましたよ)

2 Bi tèr nomiig urid unshsan. Odoo óór nom Unshna. (わたくしはその本を以前に読みましたよ。今では他の本を読みます)

3 Daraa bichisén hoyor héség úgiig.

次ぎに書いた(所の=連体形)二個の文字。

なお外蒙新文典中の過去形、jée (chéè), b, laa (lèè, loo, lóó) の例を挙げると、

1 Ert tsagt Erhii mérgén gēj yabjée. (昔エルヒー・メルゲンという人が歩いていた)

2 Manai húú èné namar surguulid orob. (私共の男の子が、この秋に学校には入つた)

3 Bi saya boslo. (わたくしは今起きた許りだ)

外蒙の新文典には大過去に jée を用いることになつてゐるが、各所に出て来る jée の接尾語を調べるのに、jée を大過去でなく、中過去位の時にも多く使つてゐるようであるので jée なる接尾語は昔というよりは、大分時間を経過した時に用いると思えば大過なからう。

今 jée を用いた二三の例を挙げるならば

イ Ok tyabriin ih hubisgal 1917 onii arban négdúgée sariin doloonii ódór mandjée.

(十月大革命は1917年の十一月七日に發生した)

ロ Mongoliin tsól tal gazart olon myangan jil yum zooh ni zóbhón témée baijée.

(蒙古の沙漠地帯にては幾千年の間、物を運ぶのは唯駱駝のみであつた。

ハ Manai aam èné ih témtséld èé yamagt bútemj amjiltiig olsoor irjée.

(わが黨は此の大斗争に必ず成功を得て來た)

ニ Minii baruun gar húchtéi ajil hiih buyou hoboo tatahad tamir muutai boljée.

(わたくしの右手は力仕事をしたり、又は算の水を引いたりするのに氣力が衰へた)

此等の例より見ても jée は、大分年月の経つた時を表わすのに用いられてゐる。

第八、大文字、小文字について

外蒙で用ゐる新文字(即ちロシア文字には大文字、小文字の區別があつて、その何れを用ゐるかについては規則があるが、半母音の i や硬音符號や軟音符號等の四文字に限り大文字はない。

今大文字の使い方について述べると、

1 文章の始の言葉は大文字で書始める。例えば、

Zun bolob (夏になつた) の Z

2 人の名前や姓は大文字で書始める。例えば

Mónh, Zorikt の M. Z

3 山、川、湖、海、州等の特別の名前を大文字で書始める。例えば

Amar mürün (アムール河) Azi tèb (アジア洲) Herlen gol (ケルレン河) Bogd uul (聖山) の A, A, H, B

4 市、部 (アイマツク)、村 (トスホン) の名前を大文字で書始める。例えば

Ulaanbaatar hot (ウランバートル市) Selenge aimak (セレンゲ部) の U, S

5 國家の特別な名前を大文字で書始める。例えば

Brazil, Argentin, Mongol, Solongos (朝鮮) の B, A, M, S

6 數語より成る國家の名前、及び國の中央官廳等の機關の名前は各語毎に大文字で書始める。例えば

Mongol Ard Uls (蒙古人民共和國) の M, A, U

7 國家及び國の中央機關以外の數語より成る名前は唯だ最初の言葉を大文字で書始める。例えば

Ih surguuli (大學校) Sabangiin Zabod (石鹼工場) の I, S

8 大文字で書くべき國家の名前が若しも唯だ人民の名前として用いられるならばこれを大文字では書かない。例えば

Gudamjaar hoyor hyatat yabj baina. (街路を二人の支那人が歩いている) の h

なおこの外に大文字で書くべき國家の名前の言葉が唯だ品物の名前として用いられる場合、例えば蒙古靴とか支那の緞子とかいう時の蒙古、支那を表わすには小文字を用いる。例えば

Bi ééjdée mongol gutliig égéb. (わたくしは自分の母に蒙古靴をあげた) の m

第九、句讀點、記號について

舊來の蒙古文字で書いた文章であると文の終りに二つの點即ち dabhur chég を置き、文中に於て一つの句の切れ目に置く點を chég といい、經文等で文の終りに置く四つの點を durbéljin chég といい、又經文等で文の最初に置くのを birga といい、これ等の記號が普通に用いられていた。しかし外蒙古の新文典によると次の如き種類がある。即ち

文の終りに置く點 (.) を cheg といい、文中の各名詞の間に置く (,) を taslal といい、(:) dotorhoiloh chég をといて、文中に各名詞を並べたり、或は説明する前の言葉の次に置くものである。例えば

Manai ardiin mal bol: honi, ùhèr, …… (わが國民の家畜は; 羊、牛……)

という折に用いる。

又疑問文の終りには疑問の符號 ? (asuultiin témdeg) を置き、感嘆文や命令文の終りには感嘆の符號 ! (anhaartiin témdeg) を置く。

或る著作より文を引いて來たり、他の語を其の儘抜き書きしたり、又は本の名前を【 】(hasilt)で圍む、又()(haalt)という記號もある。

以上の外に英語の - (はいふん)よりは少し長目の物で、蒙古語で juraas というのがあつて、これは前に多くの名詞を並べーを引いて、これらの物は…であるという様な時に用いる。例えば Zorig.(志), idèbh (勇敢), sanaachilaga (意思), ünèench (誠實), sain sètgel (良心) — èdgeèr bol yamar chi хүнд их хэрэгтэй. (これらの物はいかなる人にも大いに必要である)の如きである。

パーセントの事は蒙古語で hubi といい、%の記號を用いている。

第十、人の名前の書方について

蒙古文字には活字体の字と筆記体の字との區別はあつても、他の外國の文字に見るような大文字、小文字の別はなかつたが、ロシア文字によつて蒙古語を表わすことになると、當然大小兩文字の區別が起つて來る。従つて人名等は太文字で書くのであるが、その例を挙げると
(第八にもあり)

イ 人の名前は皆太文字で書き始める。例えば

Balda. Shargal.

ロ 二語より成る一人の人の名前は續けて書く。例えば

Ulabayar. Damdinjab.

ハ 若し二語より成る一人の人の名前で、男女兩性の語より成つてゐる時は、兩語の間に——を置く。ただしこの場合には各語共太文字で書き始める。例えば

Buyan — Ólzii

ニ 男女兩性の語より成る人名に、接尾語を附して、誰々の、誰々からという意味を表わす時には、二つの言葉の最後の性別により、男性ならば男性の接尾語を、女性ならば女性の接尾語を附するのである。例えば

Sühvaataraas (スフ・バートルより)において、Süh が女性語で vaatar が男性語故この vaatar なる男性語に調和させて、aas なる男性の接尾語を附けたのである。

第十一、外國語の書方について

外蒙(實際はモンゴル人民共和國)はソ連と國境を接するので外蒙語の中には、ロシア語が非常に多く混入して居り、殊に最近科學上の言葉や、官公署の名前、政治、經濟に關する言葉には、ロシア語が其の儘は入つて居る。然し中國語も少し混じつて居り之は古く中國語から蒙古語化された chonh (窓戸=窓), yanz (様子=見本、様子)の如きは外蒙に於ても使用されている。是等の外國語は次の如き規則に従つて書かねばならん。

- イ 轉來した外國語で一般に知れ渡っている物は蒙古語の規則に従つて書く。例えば
sil (がらす), sabhi (長靴), sudar (旦那、あなた)
- ロ 最近外國語より轉來した言葉は、その言葉の發音や文体に注意し、ロシア語より轉來した言葉は、ロシア語の通りに一般の定めに従つて書くものとす。例えば
motor (モーター), trest (企業合同), traktor (トラクター)
- ハ 外國語より轉來した言葉は、蒙古語の母音調和や、曖昧な母音の規則、移動する母音の規則に従わないものとす。
- ニ 轉來した外國語に、蒙古語の接尾語を連結せしめることができる。その場合外國語に男性母音があるならば、男性の接尾語を連結する。例えば
aitek に aas (より) なる接尾語を連結して aitekaas となり、armi (軍隊) に ar (によつて) なる接尾語を連結して、armiar となり、mehanik (機械學) に chilsan (……化されたる) を連結して mehanikchilsan (機械化されたる) となる。
- ホ 特別な子音文字である k の字は g の字と同様に見て、適當な接尾語を連結する。例えば
fabrik (工場) に蒙古語 iig (……を) を連結して fabrikiig (工場を) とする。
- ヘ 外國語に何か一つの男性語がないと、女性語の取扱いをして、蒙古語の女性語の接尾語を連結する。例えば
himi (化學) に蒙古語の女性語の ës (より) を連結して himiës とし、shef に蒙古語の第二格の助詞 iin (の) を連結して shefiin とする。
- ト 又ロシア語の y の字を蒙古語の ú の字の如く女性語として見、女性の接尾語を連結する。
例えば、ロシア語の
Klub (俱樂部) に蒙古語の女性の接尾語 èës (より) を連結して Klubèës とし、grupp (集團) に蒙古語の女性の接尾語 èér (によつて) を連結して gruppèér とする。又 propusk (通行許可證) という語の u の字は女性の母音と見て、言葉全体を女性語の中に入れたいが、この言葉の中に男性の母音 o があるので、蒙古語の男性の接尾語 aas (より) を連結して propuskaas とする。

第十二、言葉の略し方について

従來の蒙古文字による蒙古語だといかに長い固有名詞でも簡単にすることのできない不便があったが、新文字によると、極めて簡単に省略することができ、非常に便利になつた。しかしこれには次の二つの方法がある。

- 1 言葉の最初の第一音節で省略する。例えば

Mongol Ardiin Hubisgalt Namiin Tób Horoo. (蒙古國民革命黨中央委員會) を Mo. A. Hu. Na. Tò. Ho. と略して書く。

2 言葉の最初の文字によつて略す。例えば

上記の Mongol Ardiin Hubisgalt Namiin Tób Horoo. を M. A. H. N. T. H. というふうに略す。

而して略された各語の間には (chég) を置くことになつている。

以上で新文字による外蒙文典の、従來の文典と異なる點を挙げ、かつ従來の文典と比較説明したのであるが、尙最後にこの新文典を一讀して言葉の發音上變つた點を一二挙げてこの稿を終り、残つた部分については他日稿を改めて述べる積りである。

1 言葉の第一音節に i なる母音があり、その後の音節に男性系の母音 a, o, u の何れか一つの母音が來ると、第一音節の i なる母音が後の母音の影響を受けて ya 或は yo の音に變ることである。此の事をよく理解して置かないと、文章の中で突然 ya, yo に始まる言葉に遭遇した時に幾ら辭典で調べても分るものではない。今第一音節母音が ya, yo に變化した例を挙げると、

chinar (性質) — chanar, hitat (支那) — hyatat, chidana (できる) — chadna, nilha (赤坊) — nyalh, ilgal (區別) — yalgal, imaga (山羊) — yamaa, chimada (君に) — chamd, hiragu (霜) — hyaruu, irogar (底) — yoroor, jirgal (快樂) — jargal, minggan (千) — myangan.

ただし bida (われわれ) の如く言葉が二つの音節より成り、しかも最後が母音で終つている様な語は第一音節にアクセントがあつて、bid と發音しているので、斯かる音節の數の少ないかつ最後が母音で終つているような語は例外と見て好いと思う。

2 第一音節に è 母音があり、第二音節以下に ó 又は ù があると、前者か後者の影響を受けて ó の音になつている。例を挙げると

édór (天氣) — ódór, èbèsü (草) — óbs, tèmúr (鐵) — tò mòr, èbügén (老人) — óbgón, èdúi (未だ) — ódii, èbül (冬) — óbül

尙 édór (天氣) を ódór, èbül (冬) を óbül と發音する形は元朝秘史にも數多く現われ漢字の兀で書き表わしてあるので、外蒙では昔の儘の音が残つているものと考えられる。